

87 誌上発表

森鼻宗次と彌性園の医師

田中 祐尾

大阪市立大学医学部

明治新政府は西洋医学の教育路線をどの国のものかに設定するかについて当時開成学校（大学南校）に在籍していたフルベッキ（1830～98）に意見を求めた。フルベッキは英国医学、オランダ医学のどちらをも採らず、当時ヨーロッパ最先端のカリキュラムを持つとされたドイツ医学を強く推挙。大隈重信や副島種臣、内務省官僚の相良知安・岩佐純らの合議で政府は明治2年ドイツ医学を国の医学制度に据え、2年遅れで大学東校にミュレル（外科）、ホフマン（内科）が来日したが、オランダからの派遣医師、化学者はその後も続き14名に上った。特にオランダ医学の影響を強く受けたのが大阪高等医学校でボードインの後任となったエルメレンスで、1870年から7年間、 Groningen 大学教授としての本格的オランダ医学を教え多くの人材を生んだ。一方幕末の緒方洪庵の適塾に育った人々もこの大阪医学校に多く関わった。のちに堺県医学校病院長を務めた森鼻宗次もその一人で、晩年は洪庵の開発した種痘法を開業医師に伝授した。内務省は大学東校の久我克彦助教に命じて『種痘亀鑑』を発行し全国に流布させたが、それでもなお種痘の技術そのものの正しい習得が不可欠だった。その後各府県別に医師免許とは別の「種痘医免許」を制定し、地方では種痘医自身が個人的に新しい種痘医を育てた。一方医師の国家資格については、当時はまだ医学校卒業の医師が少なく、医療の底辺で市井の人々の病や医療行政に携わる開業医の数が足りず、明治十二（1879）年、国は幕末に育った漢方医たちや幾分医学の素養を持った人たちに「開業医師免許試験」を実施し免許を得る過程、また得たのちも医学校での授業と実習に当たらせた。『八尾市史（近代）資料編Ⅲ』に明治十三（1880）年九月河内国八尾役所部内「開業医師印鑑名簿」というのがあり、12名の開業医合格者登録のうちに彌性園10代当主田中祐篤（寛治郎）と11代徳太郎の兄弟の名がある。この時期全国を挙げて種痘の施行が急がれ、田中徳太郎（11代祐篤）は八尾町ほか25村の種痘担当医に加え、更に3村の担当増加を命じられた。推定接種者は千人を超える。森鼻宗次は若くして適塾に入門、のちに蘭学、英語にも堪能となり、明治三年大阪医学校試験に採用されてのち文部省直轄の副薬局長になった。英米の内科・外科・薬学書を多く翻訳し、中でも「皮下注射要略」は注射という新しい技術を短期間に大阪から発信した。その後一時期堺県医学校の校長を務め明治十二年当地で初の病理解剖を行った。その後も自ら郡部の開業医に患者を訪れて内科診察や麻酔下の手術まで行った。明治十一（1878）年、大阪の開業医が「医事会社」今の医師会を結成。その機関誌『刀圭雑誌』創刊号の15頁に森鼻宗次が出張手術をした記事が載っている。「河内国八尾東郷村平民池田丑松ナルモノ 齡二十有余体質強健平生車曳キヲ以テ業トス。一日誤マッテ左前肘ニ創傷ヲ被リ僅カーインチナルモ出血甚ダシク因テ村医某ニ治ヲ乞フ。」（以下口語要略）「村医（田中寛治郎）は法のごとく縫合したが、仕事の後、患部に血種が膨隆して縫合部から出血した。偶々近村に往診し要請を受けた森鼻宗次が彌性園診療所を訪問して丑松を診察し、後日手術の用意を整えて村医を相手にクロロホルム麻酔下で動脈結紮術（推定）を施行した。丑松は数日を経て元気で車夫の職業に復帰した。」というもの。

明治初期の医療として、開業医の診療地域で全身麻酔による手術をした事実はかなり珍しいトピックスとして掲載されたが、前記の開業医国家試験の内容は、その実習面での教育が極めて不完全で、受験生が均一の臨床実習をできなかったこと、また基礎医学の実習としての解剖や病理の実習は専ら医学校での見学に頼るしかなかった。明治初年エルメレンス以下の大阪医学校の教授陣はこのことをよく解っていて、日にちを限定して講義の聴講、講義ノートの複写と回し読み、解剖の見学、そして患者の診察や治療の見学など、オープンキャンパスシステムを敷いていた。17世紀のオランダ・ライデン大学の解剖教室に多くの市民が取り巻いて見物している有名な絵画が遺っているが、この開業医師試験が廃止された明治二十五（1892）年と同時期にオランダ人教師も去って、以後大阪大学医学部病院または近辺病院にこの開業医向けカリキュラムは見当たらない。